原　著

伝統的な言語文化の再話作品の諸相2

―東京書籍発行小学校国語科教科書掲載の「いなばの白うさぎ」について―

原　田　留　美
新潟青陵大学福祉心理学部社会福祉学科

Various Retellings of a Traditional Tale Found in Japanese Linguistic Culture (Part 2)

: the Inaba no Shiro Usagi Tale in Elementary-School Textbooks Published by Tokyo Shoseki

Rumi Harada
NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY FACULTY OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE

要旨

2015年度より使用されている東京書籍発行の小学校２年生用国語科教科書に掲載されている「いなばの白うさぎ」の、文学作品としての特徴について、初出のひかりのくに版、他社発行の教科書に採用されている同じ神話の再話作品と比較しながら考察した。

その結果、次の特徴を見出した。オオクニヌシの物語として構成されている。登場人物の個性や心理の起伏にはあまり筆を割かずに、起きた出来事について簡潔に述べる形で物語が進んで行っている。兎の予言が取り入れられているため、兎とオオクニヌシとの関係が、助けを受ける愚か者と助ける優れた者という単純な関係では終わっていない。

東京書籍版は、他社発行の教科書に採用されている稲羽の素菟神話の再話作品よりも、簡潔という意味において原典の古事記の雰囲気を伝える形で再話がなされていると考える。

キーワード

再話、いなばのしろうさぎ、古事記、伝統的な言語文化、小学校国語科

Abstract

This paper analyzes the literary and narrative characteristics of the retelling of the Inaba-no-Shiro-Usagi story contained in second-grade elementary-school Japanese language-education textbooks published by Tokyo Shoseki, and compares this retelling with other versions in similar textbooks used in Japanese elementary schools, including a previous retelling by the same author published by Hikarinokuni.

Analysis revealed that the story had been retold so as to focus on O-Kuni-Nushi as the tale’s main protagonist. With little time spent describing the personalities, motivations and feelings of the story’s characters, this version instead simply gives each major event as the story progresses. However, one characteristic of this retelling is that it includes the prophecy given by the rabbit to O-Kuni-Nushi, and the relationship between these two therefore does not wind up simply being portrayed as “a fool needing help” and “the hero saving him.”

Compared with alternate retellings of the Inaba-no-Shiro-Usagi story in other textbooks, the Tokyo Shoseki version offers a more straightforward retelling of the original tale, thereby conveying the mood and spirit of the Kojiki original.

Key words

retellings, Inaba no Shiro Usagi, Kojiki, Records of Ancient Matters, traditional linguistic culture, Japanese language teaching in elementary school

Ⅰ　研究の対象、目的、方法

2015年度から使用されている『新編新しい国語二上[2)]』（東京書籍）には、「いなばの白うさぎ」（文　かわむらたかし、絵　くすだじゅんこ）が掲載されている。これは古事記の稲羽の素兎神話の再話作品である。

この作品の初出は、西出みち他４名編『きょうのおはなしなあに春（改訂版）[3)]』（ひかりのくに株式会社1997年。以後、ひかりのくに版と称す。）である[1)注1)]。ひかりのくに版は、家庭や幼稚園・保育所等での読み聞かせ用お話集として編集された書籍に掲載された短編物語の一つである。活字が小さいが、すべての漢字にふりがながついており挿絵もついているところから、ある程度の読書力のある幼児（本稿では幼児の範囲に小学校低学年も含めることとする。）ならば一人で読むことも可能なつくりになっている。

ひかりのくに版と教科書掲載作品（以後、東京書籍版と称す。）を比較すると、異なる点が認められる。

東京書籍版で改訂された主な点は、次の三つである。いずれも、教科書掲載に当たり、小学校国語科の教材として望ましい形にあらためた結果のものであろうことが推測される。

①　物語の進み方

②　表記[注2)]

③　語彙[注3)]

これらのうち②と③は、二年生の学習水準を踏まえて改められたものだろう。一方①の改訂には、物語作品としての質の変化につながるところがあるのではないかと考える。率直に述べるなら、①により東京書籍版は再話作品としてより良くなっているのではあるまいか。そこで本稿では、①の物語の進み方の改訂により、ひかりのくに版と東京書籍版とでは作品としてどのように変わったかについて分析する。さらに、すでに考察した他社の小学校国語科教科書に掲載されている再話作品とも比較し、古事記の稲羽の素兎神話の再話作品としての、東京書籍版の特徴について明らかにしていきたい。

なお、検定教科書に掲載されている再話を扱うものの、本稿では教材研究の立場からではなく、文学研究の立場からの考察を行うものであることをあらかじめ断っておく。ただし、文学研究の立場から教科書掲載作品について考察することは、教材となる作品の基本的な性格や傾向を押さえることとなり、これは間接的には教材研究に資するものであると考えていることも併せて申し述べておきたい。

再話作品によって登場人物や国名の呼び方や表記に違いがあるが、混乱を避けるため、本論では再話作品の原文の直接的引用部分を除き原則として兎、ワニザメ、オオクニヌシ、ヤガミヒメ、兄弟神、出雲、因幡と書くことにする。再話物語の呼び方については「いなばのしろうさぎ」で統一する。引用部のルビは省略した。ただし、古事記神話の紹介・引用の部分においては、オホクニヌシ、「稲羽の素兎」と表記することとする。

Ⅱ　ひかりのくに版と東京書籍版の物語の進み方の違い

本節では、ひかりのくに版と東京書籍版との物語の進み方の違いについて整理することとする。最初に、ひかりのくに版の物語の進み方を箇条書きにて示す。

a　出雲国のオオクニヌシには八十人の兄弟神がいた。

b　兄弟神たちは、因幡国のヤガミヒメに求婚するために、末子のオオクニヌシに大荷物を持たせて出かける。

c　毛をむしり取られた兎が泣いているのに出会う。

d　兄弟神が事情を問う。

e　兎がいきさつを話す。隠岐の島に住んで

いたが、因幡国に行きたかったため、ワニザメに数比べを申し入れた。岸まであと一匹のところで、騙したことをワニザメに告げたところ、毛をはがされてしまった。

ｆ　意地悪な兄弟神が、海の水で丁寧に体を洗い海風に当たれば良いと嘘の助言をする。

ｇ　言われたとおりにしたところ、傷が悪化して兎は苦しむ。

ｈ　そこへオオクニヌシがやってきて、体を川の水で良く洗い、ガマの穂を敷き詰めて何度も寝転がるよう助言する。

ｉ　言われたとおりにすると、毛が元通りに生えそろう。

ｊ　兎は、意地悪な兄弟神とは違い優しいオオクニヌシを賞賛し、ヤガミヒメがオオクニヌシを選ぶであろうこと、兄弟神との立場が逆転するであろうことを予言する。

ｋ　兎の予言どおりになり、また、オオクニヌシがこの国を治めることとなった。

次に、上記のａ～ｋが、東京書籍版ではどのような順番になっているのかを示す。こちらにはアルファベットの大文字で示す。アルファベットが斜体字になっているＤＥが、ひかりのくに版と異なる位置にある項目である。また、ＤＥの下線部は、ひかりのくに版とは違っている部分である。

Ａ　出雲国のオオクニヌシには八十人の兄弟神がいた。

Ｂ　兄弟神たちは、因幡国のヤガミヒメに求婚するために、末子のオオクニヌシに大荷物を持たせて出かける。

Ｃ　毛をむしり取られた兎が泣いているのに出会う。

Ｆ　意地悪な兄弟神が、海の水で丁寧に体を洗い海風に当たれば良いと嘘の助言をする。

Ｇ　言われたとおりにしたところ、傷が悪化して兎は苦しむ。

D　そこへオオクニヌシがやってきて、事情を問う。

E　兎がいきさつを話す。隠岐の島に住んでいたが、因幡国に行きたかったため、ワニザメに数比べを申し入れた。岸まであと一匹のところで、騙したことをワニザメに告げたところ、毛をはがされてしまった。そこへやってきた兄弟神から、海の水で丁寧に体を洗い海風に当たれば良いと助言をされたので、それに従ったら傷が悪化してしまった。

Ｈ　オオクニヌシは、体を川の水で良く洗い、ガマの穂を敷き詰めて何度も寝転がるよう助言する。

Ｉ　言われたとおりにすると、毛が元通りに生えそろう。

Ｊ　兎は、意地悪な兄弟神とは違い優しいオオクニヌシを賞賛し、ヤガミヒメがオオクニヌシを選ぶであろうこと、兄弟神との立場が逆転するであろうことを予言する。

Ｋ　兎の予言どおりになり、また、オオクニヌシがこの国を治めることとなった。

上から明らかなように両者の違いは、兎が毛をはがされた事情を告げる相手に認めることができる。ひかりのくに版ではｄで先にやってきた兄弟神たちに話している。一方東京書籍版ではＤで後からやってきたオオクニヌシに話している。先に述べたように、ＤＥの位置、すなわち物語の進み方が異なっているためにこのようになっているのである。そしてそれに伴い、Ｅに盛り込まれている情報にも違いがでている。Ｅには、兄弟神の助言が原因で傷が悪化していることが含まれている。

Ⅲ　ひかりのくに版と東京書籍版の物語の違い

前節では、両作品の物語の進み方に違いがあることを確認した。本節ではこのことを踏まえ、二作品の物語がどのように異なっているのかについて整理する。

ひかりのくに版と東京書籍版の冒頭はほぼ同じで「いずもの国の　おおくにぬしのみことには、たくさんの（ひかりのくに版は、八十人の）　あに神がいました[注4)]。」となっている。この一文により読者は、オオクニヌシが主人公であろうという予想をたてて物語を読み始めることになる。そしてその次の段落から、兄弟神たちがヤガミヒメに求婚するために因幡の国に出向いたこと、その際にオオクニヌシを荷物持ちにしたこと、道中一行が毛をむしり取られた兎に会ったことを知る。

この後ひかりのくに版では、兄弟神が兎にいきさつを尋ね、それに兎が応じている。ひかりのくに版は、見開き２頁に物語が収められており、一行あたりの文字数は23、全54行となっているが、兎が兄弟神に語るいきさつは16行に渡っている。全体の三割近い行数を用いて、兎と兄弟神の場面が続く。その後、ｈに至りオオクニヌシが登場するが、この段落の最初は35行目に当たっている。この時点で読者はすでに物語の六割以上を読み進めていることになる。冒頭で主人公であろうという印象を抱いた登場人物の行動が語られるのは、後半もだいぶ進んでからということになる。兎が傷を負ったいきさつを語る相手が兄弟神になっているため、オオクニヌシの印象が残りにくい物語の進み方となっていると言えるだろう。

しかし同時に物語の結末部分には、つぎのようにある。

「やがみ姫はきっと、あなたと結婚することでしょう。あなたは、今は荷物持ちのお供ですが、帰りはきっと、兄弟神さまたちがお供になっていることでしょう」

うさぎの予言したとおりになりました。賢くて、心のやさしいおおくにぬしの命は、この国をよく治めて、人びとの暮らしは少しずつ豊かになっていきました。

オオクニヌシが兎を救っただけにとどまらず、求婚に勝利することを兎が予言している。さらに、兎の予言通りになっただけでなく、オオクニヌシが国の支配者になったことにも言及がなされている。

最後のこの下りは、冒頭の「出雲の国のおおくにぬしの命には、八十人の　兄神がいました。」に対応していると考える。冒頭と結末は、この作品がオオクニヌシの物語であることを示していると言えるだろう。

このように見てくると、ひかりのくに版には、冒頭・結末と、途中では、登場人物の扱い方にずれがあることがわかってくる。

なお、古事記の稲羽の素兎神話では、兎が負傷のいきさつを語る相手はオホクニヌシとなっている。よって、兎による兄弟神相手の事情説明は、ひかりのくに版独自のアレンジと言える[注5)]。

ひかりのくに版には以上のようなずれが認められるが、物語の進み方が変わった東京書籍版はどのようになっているのだろうか。

表記を別にすれば、ＡＢＣは、ひかりのくに版のａｂｃと同じである。また、Ｉ以降も、ｉ以降とほぼ同じである。すなわち、冒頭と結末部分においてオオクニヌシの物語である印象が強まる記述になっている点では、東京書籍版も同じと言える。

一方、すでに指摘したように中盤の物語の進み方には違いがある。兎が傷を負ったいきさつを語るのは、オオクニヌシになっている。このことによりひかりのくに版に比べて、兄弟神の登場している場面が短くなり、オオクニヌシが登場している場面が長くなっている。読者は中盤においてもオオクニヌシの存在を意識しながら兎の語りを読み進めていくことになる。冒頭から中盤、そして結末に至るまでオオクニヌシを意識し続けることになるため、ひかりのくに版よりもオオクニヌシの印象は強くなる。オオクニヌシの物語としての一貫性が保たれていると言えよう。

Ⅳ　東京書籍版と光村版・教育出版版との比較

本節では東京書籍版を、他社が発行している小学校２年生対象の国語科教科書に掲載されている稲羽の素兎神話の再話作品と比較することで、その特徴についてさらに考えてみたい[注6)]。

以前、光村図書ならびに教育出版の教科書に掲載されている稲羽の素兎神話の再話作品それぞれの特徴について考察を試みた[9)][注7)]（以後、各々光村版[4)]、教育出版版[5)]と称す）。その結果、光村版はオオクニヌシ中心の物語で、登場人物の個性や心理の起伏を丁寧に描いており、登場人物の気持ちにより添って読み進めていく作品と考えるに至った。一方、教育出版版については、兎中心の物語で、登場人物の心理に深入りすることがなくある程度パターン化された人物の描き方が認められ、古い説話の雰囲気を楽しむに適した作品との特徴を見出すに至った。

東京書籍版もオオクニヌシ中心の物語となっており、その点で光村版と共通している。しかし、登場人物の個性や心理の起伏の描き方には違いが認められる。

冒頭、光村版は次のようになっている。

むかし、むかし、大むかし。
いずもの国に、八十人ものかみさまの兄弟がいました。そして、自分こそ、国をおさめるのにふさわしいと、たがいに力をきそい合っていました。でも、すえっ子のオオクニヌシだけは、あらそうことをこのみませんでした。兄さんたちは、弟をいくじなしとわらい、しごとを言いつけては、こきつかいました。

ここからは、オオクニヌシと兄弟神の性格や態度の違いが明確にわかる。東京書籍版が「いずもの国の　おおくにぬしのみことには、たくさんの　あに神がいました。」とのみ述べるのとは相当に異なっている。

光村版のみならず教育出版版と比べても、東京書籍版は、起こった出来事を簡潔かつ淡々と語る形で物語が展開している点に特徴を認めることができると考える。そのことが顕著に示されているのは、兎がワニザメをだます場面のやりとりである。以下、三作品の引用をする。

まず、光村版。
「われわれうさぎと、きみたち　わにさんと、どっちが多いか少ないか、くらべてみないか。」
すると、わには、
「そりゃいい。しかし、どうやるのかね。」
とききました。
「かんたんだよ。」
と、わたしは答えました。
「わにさんをぜんぶあつめて、けたのみさきまで一れつにつながっておくれ。せなかの上を、わたしが　ぴょんぴょんとんで、数えよう。」
「なるほど、うさぎさんはかしこい。」

次に教育出版版。
「わにくん、この　しまに　いる　ぼくたち　うさぎと、きみたち　海に　いるわにと、どっちが　数が　多いと　思う？」
「さあ、わからないね。」
と、わにが　答えました。
「きみたちは、海の　間を　ずうっと　一列に　ならんで　ごらん。そう　したら、ぼくが　きみたちの　せなかを　ふんで、一つ、二つ、と　数えて　みよう。ぼくは　数えるのは　うまいんだ。」
ぼくが　そう　言うと、わには　しばらくかんがえてから、
「めいあんだ。やって　みよう。」
と、答えました。

最後に東京書籍版。
「わたしの　なかまと　きみの　なかまの

どちらの　ほうが　多いか、くらべっこ　しようよ。ずうっと　つながって、ならんでごらんよ。わたしが　数えて　あげる。」

東京書籍版にはワニザメの反応やせりふはない。冒頭の語りだし方とも考え合わせるに、簡潔である点にこの再話作品の特徴の一つを認めることができるだろう。

さらに、東京書籍版には、結末部分にも顕著な特徴を認めることができる。それは、兎の予言を物語中に取り込んでいる点である。

古事記の稲羽の素兎神話には、オホクニヌシの助言で傷が癒えた兎が、「この八十神は、必ず八上比売得じ。ふくろを負はせども、汝命、得ましむ[7)]」と、ヤガミヒメが求婚を受け入れるのはオオクニヌシであろうと予言し、さらにその通りになったことが語られている。この下りを再話作品に取り入れるためには、冒頭で八十神一行が求婚のために因幡国を訪れたことに触れる必要がある。兎の方に焦点を合わせる形で再話されている教育出版版はそのことに触れていないため、結末部分で予言の要素が入る余地はない。一方、光村版では、ヤガミヒメの固有名詞はでてこないものの、求婚のために因幡国に出向いたことは語られている。しかし、結末部分で求婚の結果がどうなったかについてはふれられず、次のような形で物語が終わっている。

それからというもの、「オオクニヌシこそ、八十人の兄弟の中でいちばんすぐれた方だ。」と、世につたわるようになりました。

そのため、兎の予言にも触れられることはない。

これらに対し、兎の予言を取り入れたことで、東京書籍版の結末部分での兎とオオクニヌシとの関係に変化が出ていると考える。東京書籍版の結末部分を引用する。

「やがみひめは　きっと、あなたと　けっこんする　ことでしょう。あなたは、今は　にもつもちの　おともですが、帰りは　きっと、あに神さまたちが　おともに　なっている　ことでしょう」

うさぎの　予言した　とおりに　なりました。かしこくて、心の　やさしい　おおくにぬしのみことは、この国を　よく　おさめて、人びとの　くらしは　少しずつ　ゆたかになっていきました。

悪知恵を巡らせワニザメをだまそうとしたものの、自らの愚かさ故に報いを受けた兎。その兎に正しい治療法を教えたオオクニヌシ。そのオオクニヌシに対して、兎は求婚成就のみならず兄弟神との力関係が逆転することについても予言し、それが現実となったとある。助けられる側であった愚かな兎が、八十神も、そしておそらくはオオクニヌシ自身も予想だにしていなかったであろう未来を予言する存在でもあったことが示されている。東京書籍版の兎とオオクニヌシの関係は、愚かで弱いだけの存在と優れた存在との対比のみにはとどまらないものであり、他の再話にはないおもしろみが付加されていると理解されよう[注8)]。

Ⅴ　まとめ

以上、東京書籍版について、ひかりのくに版、光村版、教育出版版と比較しながらその特徴について考えてきた。その結果、以下の点に特徴が見出せると考える。

・オオクニヌシの物語としての構成が一貫している。
・登場人物の個性や心理の起伏にはあまり筆を割かずに、起きた出来事について簡潔に述べる形で物語が進んで行っている。
・兎の予言が取り入れられているため、兎とオオクニヌシとの関係が、助けを受ける愚か者と助ける優れた者という単純な関係で

は終わっていない。

Ⅳで触れたように、光村版と比べて教育出版版には、登場人物の心理に深入りすることがなく人物の描き方にある程度パターン化されたところが認められ、古い説話の雰囲気を楽しむに適した作品であるという特徴を認めることが出来るが、東京書籍版は教育出版版よりもさらに簡潔で、原典の古事記の雰囲気がより伝わりやすい再話となっていると考える。

なお、原典である古事記神話の記述内容や物語進行に近いことが良い再話の条件かというと、特に個々の神話を独立した作品として扱う場合には、そうとは限らないと考える。読者である子どもをどのように意識するか、そして神話のどのような面に焦点を当てて再話するかによって、物語は相当に変わってくる。本稿では詳しく触れなかったが、三省堂が出版している小学校１年生向け教科書[6)]に掲載されている稲羽の素兎神話再話作品は、古事記のそれとは相当異なった形で再話されているが、そのスタイルにはより幼い子どもへの配慮が明確に認められる[注9)]。再話の際、再話者の狙いや姿勢がぶれることなく作品の姿に映されているかどうかが、まずは問われるのではないと考えるものである。

注

１）http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/　2015年11月15日参照
なお、ひかりのくに版の作品名は「因幡の白うさぎ」。挿絵は原田継夫が担当している。

２）②については、たとえば、「出雲」を「いずも」、「隣あった」を「となりあった」、「兄神」を「あに神」のように漢字表記を仮名表記に改めたところがある。逆に、「かぞえて」を「数えて」、「はえそろいました」を「生えそろいました」のように、仮名表記を漢字表記に改めたところがある。

３）③については、たとえば、兄弟神の助言を入れて傷が悪化した兎が苦しむ場面では、ひかりのくに版では「のたうちまわって苦しんでいる」となっているが、東京書籍版では「くるしんで　ころげまわっている」となっている。

４）引用部分の表記は東京書籍版によった。

５）なぜこのようなアレンジを加えたのかは不明だが、ひかりのくに版には物語一つ一つに保護者向け注記が掲載されており、この作品に関して次のような記述がある。「大国主命の優れた力を示すもので、うさぎの悪知恵をいましめるだけの話ではありません。」
あるいは、オオクニヌシの優れた力と、兎の悪知恵のいましめの両方に焦点を当てようとしたためのアレンジだったか。

６）三省堂は一年生対象の国語科教科書に稲羽の素兎神話の再話作品を掲載しているが、物語の進み方が他社の教科書掲載作品とは大きく異なっている。おそらくは対象学年が違うことから、より幼い子どもへの配慮が必要と判断された結果ではないかと推測するが、他社の再話作品とは状況を異にするため、ここでは比較対象から外すことにする。なお、当該作品については、原田（2011）を参照されたい。

７）原田（2011）を参照されたい。

８）古事記の稲羽の素兎神話では、この兎は神であったことが述べられている。

９）注の７）に同じ。

文献

１）http：//ten. tokyo-shoseki. co. jp/text/shou/kokugo/　2015年11月15日参照
２）新しい国語２上．東京：東京書籍；2017.
３）西出みち，安部紀秀，田中たみ子，川端町子，鈴木穂波．きょうのおはなしなあに.

東京：ひかりのくに；1997.
4）こくご二上たんぽぽ．東京：光村図書出版；2011.
5）ひろがることば小学国語２上．東京：教育出版；2011.
6）しょうがくせいのこくご１年下．東京：三省堂；2011.
7）山口佳紀，神野志隆光．古事記．東京：小学館；1997
8）原田留美．日本の神話を補助教材としての扱う場合の問題点について―「いなばのしろうさぎ」の場合―．新潟青陵学会誌．2010；３(1)：21-31.
9）原田留美．伝統的な言語文化の再話作品の諸相―小学校国語科教材「いなばのしろうさぎ」の場合―．新潟青陵学会誌．2011；４(1)：13-23
10）三浦佑之．古事記のひみつ：歴史書の成立．東京：吉川弘文館；2007.
11）上野誠．古典不要論への反撃!? 書評劇場．東京：笠間書院；2015.
12）松村武雄．日本神話の研究第３巻．東京：培風館；1983.
13）三浦祐之．昔話と神話―古代の民間伝承―．國文学．1999；44(14)：36-40.